

3-7. 大野市（福井県大野市）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

大野市 人口 35,840 人 世帯数 11,832 世帯（平成 25.10.1 現在 住民基本台帳人口） 総面積 872.30 km²

日本百名山の一つ「荒島岳」などの山々があり、名水百選の「御清水」をはじめ多くの湧水池があることから国土庁の「水の郷百選」にも選ばれるなど豊かな自然に恵まれており、夜空がきれいなことから「星空の街」にも選定されている。また、市街地はその歴史的な風情や町並みから「北陸の小京都」ともいわれている。

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

本市は、古くから湧水が豊富であり、今日においても飲料用水などの生活用水をはじめ、農業や工業など様々な用途に利用されている。昭和 60 年に名水百選に選ばれた「御清水」、平成 20 年に平成の名水百選に選ばれた「本願清水」などの湧水池が点在するとともに、水と共生する生活様式など特有の湧水文化を育んできたことが高く評価され、平成 8 年には大野市が「水の郷百選」に選ばれた。

しかしながら、近年の地下水位の低下などにより、湧水文化の後世への引継ぎが困難な状況となりつつあったため、平成 18 年 3 月に名水のまち大野を具現化する「大野市水のみえるまちづくり計画」を策定し、さらに平成 23 年 10 月に湧水文化の再生を目的とした「越前おおの湧水文化再生計画」の策定により、市民、企業とも連携し、市全体で総合的な取り組みを進めているところである。

この成果として、本年 7 月には大野市が「日本水大賞環境大臣賞」を受賞しており、湧水文化の再生を通じた地域づくりへの機運が着実に高まってきている。

今後、これら計画における「水」を中心としたさらなる地域づくりを進めていくにあたり、今回のエコツーリズム推進アドバイザー派遣事業を活用させていただくこととなった。



(2) アドバイザー派遣実施の概要

日 時	平成 25 年 12 月 18 日（水）～平成 25 年 12 月 20 日（金）
場 所	大野地区：城下町（湧水池）、御清水、大野市観光協会、本願清水イトヨの里 他
アドバイザー	環境カウンセラー（広報戦略）、環境映像ディレクター・プロデューサー 鈴木 順一朗 氏
参 加 者	<p>【1 日目】 大野商工会議所中小企業相談所長、(株)結のまち越前おおのタウンマネージャー、大野市観光協会事務局長、観光ボランティアガイド大野ガイド、越前こぶし組番頭、越前おおの農林楽舎主任、福井県環境政策課職員 2 名、大野市職員（観光振興課、建設整備課湧水再生対策室、産業振興課、行政戦略） 計 13 名</p> <p>【2 日目】 福井県環境政策課職員 4 名、大野市職員 計 6 名</p> <p>【3 日目】 大野商工会議所中小企業相談所長、(株)結のまち越前おおのタウンマネージャー、大野市観光協会事務局長、観光ボランティアガイド大野ガイド、越前こぶし組番頭、越前おおの農林楽舎主任、福井県環境政策課職員 2 名、大野市職員（観光振興課、建設整備課湧水再生対策室、産業振興課、行政戦略） 計 13 名</p>
スケジュール・方法	<p>【1 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 現況報告 ・ 研修会① 鈴木氏より説明 エコツーリズムについて、大野市の湧水におけるエコツーリズムの可能性と現在の課題 ・ 地元関係者と意見交換 大野市観光協会、大野商工会議所、(株)結のまち越前おおの、大野市観光ボランティアガイド、越前こぶし組（車夫）、越前おおの農林楽舎 <p>【2 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 視察（研修参加者へのインタビュー等） 観光協会、市内湧水地（御清水、義景清水他）、春日神社、篠座神社、磐座神社、寺町通り、七間通り、石灯笼通り、河原酢造、イトヨの里 他 <p>【3 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 研修会② 初日の研修で出た課題に対する、視察を踏まえた提案とディスカッション

(3) アドバイスの内容

●1 日目 研修会①

アドバイザー鈴木氏より「エコツーリズムについて」の説明を受けた。4 つの理念「自然環境の保全」「観光振興」「地域振興」「環境教育の場としての活用」を押さえ、ルールづくり（罰則等、自主ルールなど）が必要である。エコツーリズムとは、全ての要素の「土台」、「残さなければならない（今あるもの、失ったもの全ての）自然」であり、今回のテーマとしては「湧水」である。この土地に来てもらい、「自然を感じながら」、「大切さを認識」して、「感動に変えて」帰っていただき、結果的には地域にもお金が落ちる仕組みが大事であることを学んだ。

埼玉県飯能市の西武鉄道と組んだエコツーリズムの実践について説明を受けた後、参加者からエコツーリズム及び本市での取組み等についての意見聴取を行った。

鈴木氏からは、大野市には「プラスアルファ」となる素材がたくさんあると感じていること、また、観光については「城下町」と「自然」の両方を楽しむ方向性が良いのではないかと感想を話され、今後のイメージ戦略で、本市のブランドキャッチコピー「結の故郷（ゆいのくに）越前おおの」における「結（ゆい）」のつながりは「水」

であるという提案をしたいとの報告を受けた。

●2日目 現地視察

湧水池の多い市街地を中心に、観光地、水に関する施設等の現地視察を行った。また、醸造会社での作業工程の見学や陸封型イトヨ生息地の南限として国の天然記念物に指定されている本願清水や「イトヨの里」にて水に関する取組み等についての学習も行った。

御清水、御清水会館

義景公園

春日神社（良縁の樹）

山王神社の池

結ステーション（結楽座、平成大野屋、時鐘、藩主隠居所）

観光協会【事務局から現状聴取等】

七間通り、寺町通り、石灯籠通り、石灯籠会館

梅林（昼食：しょう油カツ丼、おろしそば）

河原醸造（本町：蔵見学、吉：工場見学）

篠座神社

清瀧神社

イトヨの里【副館長からの説明】

磐座神社

●3日目 研修会②

アドバイザー鈴木氏より、今回の派遣事業による本市への提案等について報告を受けた。大野市は自然環境の上に成り立っている歴史ある都市であり、「水と共生する」全国を代表する地区になれる要素がたくさんある。今後、エコツーリズムを推進していく上では、「環境保全」「観光振興」「地域振興」「環境教育」の4つの柱が不可欠である。城下町人力車、とんちゃん等、様々なコンテンツはニーズに応じた俊敏な対応が必要であり、これらの土台となるのがエコツーリズムで、時間を掛けた整備が必要である。「水」が大野市の核になれると感じたとの報告を受けた。

その後、これらの状況を踏まえ、次の7つの項目について提案を受けた。

① 大野市民にとっては当たり前の「湧水」「地下水」⇒外部の者には驚きの条件

- ・ 地質や構造をもっと広報すべきだと思う（「巨大な水がめ」等）。ジオパーク的な要素として新鮮でセールスポイントになる。
- ・ 「水」⇒当たり前すぎる意識の改善
- ・ 水をキーワードに、人、物、産業等が繋がっている。全てを結び付けている「結」の根源が「水」であると強調し、売り出してはどうか。
- ・ イメージの統一化が必要かと思う。

② たくさんある観光素材の中から「大野と言えばこれ！」というシンプルなイメージづくりが必要

- ・ 例：全ての観光素材に「湧水」のニュアンスを入れ、シンプルに明確に伝える。
- ・ 映像を使ったイメージ戦略も効果的である。※鈴木氏がイメージして作成した映像データをプロジェクターにより鑑賞
- ・ スマートフォンでもハイビジョン対応のものもあり、簡単に安価に作成できる。イメージPRとして十分

使用できる。

- ・ 「結（ゆい）と出会えます。」等、水を通じた「人」との出会い、コミュニケーションを撮影してはどうか。
- ・ 市街地での撮影の際、川にゴミがあった。人に歩いてもらう（巡ってもらう）のであれば、より一層の清潔感を増すよう努めることが大事。
- ・ ブランドロゴを共通ののぼり等にして町中に設置したり、人力車や観光ボランティアの胸に付けるなどしてPRしては。

③ 「食」に関する将来構想とエリアづくり

- ・ 世界無形文化遺産となった「和食」。おおの独自の料理の創造も効果的では。
- ・ 市内の食べ物屋さんがちらばっている。「集める」ことで「エリア」の中で様々な体感（「見る」含む）が出来るようにすると良い。（参考：伊勢神宮等）
- ・ 大野市内の人の動き ⇒ 人がばらついている。集中により、いつも人がいるイメージにすることが出来る。
- ・ 湧水をネーミングにした料理を作ってはどうか。水を使う、プチほんこさん、湧水結び（おにぎり）等
- ・ 食のエコツーリズムを目指すのも良い。名物料理を考える。

④ ブランドロゴの浸透

- ・ いたるところに表示。統一的にイメージを戦略化しながら浸透させる。

⑤ 多数あるパンフレット、チラシ等の整理

- ・ 地図をメインに集約したものがあると良い。
- ・ 「結なび」は大変作りこまれているが、あまり利用されないと思われる。インターネット等でも検索でき、もっと簡単に見せる見ることが出来る方向性とした方が良い。
- ・ 携帯電話等を活用したクーポンの発行も若い世代対象として魅力的である。

⑥ 既存施設等の観光客への見せ方

- ・ 施設が立派（きれい）過ぎて、人気（ひとけ）や歴史が消えてしまっている。
- ・ 御清水を例にすると、「すだれ」や「竹あかり」を柱に設置するだけで全く雰囲気が変わる。あかりについては、特に冬場の夜など賑わいの創出や、防犯面等から集えるような場所（施設）に設置すると良いのではないか。
- ・ 座布団を敷く⇒夏場に水に足をを入れて涼む利用の仕方もある⇒地元の高校生等も利用⇒人がいるから、新たな観光客が立ち止まりやすい⇒コミュニケーションが生まれる。
- ・ 藩主隠居所は、とてもきれいであるが、整然としすぎていて利用しづらい。

⑦ 「水」と「光」のコラボによるイメージアップ

- ・ 竹あかりでライトアップなど
- ・ ライトアップによる「夜」の観光地としての魅力⇒短期滞在型観光から長期宿泊型観光へ。

最後に、各出席者から今回の研修によって感じた点等について意見を聴取し、今後の行政、各団体における施策等に、今回のアドバイザーからの提案内容、要素等を活用していくことを確認し終了した。



(4) アドバイザー派遣実施の効果

●参加者や関係者に与えた効果

参加者からは、アドバイザーからの提案を受け、地域で「人が遊んでいる」ことが観光客の誘致に繋がることや、「自然をうまく使わせてもらっている」ことに「恩返しする」ことが「エコツーリズム」であることが学べた等の感想があり、今後のそれぞれの分野における取組みのヒントとなった。

●今後の期待される効果

市民にとって、あることが「当たり前」となっている「水」に対し、大切さや今後の観光素材としての価値等を改めて学ぶことができ、これが大きな「気付き」となって、これからの取組みに良い面での影響を与えるものと思われる。

●今後の取組み

「水」を活用した取組みについて、今回のアドバイザーからの各提案を参考に、今後の各団体における施策、活動の中で検討していくこととしたい。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

アドバイザーが制作された映像による埼玉県飯能市の実際の取組みを紹介いただき、参加者は短期間でエコツーリズムに対するイメージを得ることができたと思われる。

加えて、この映像化等の取組み、イメージ戦略等が市民、観光客へのエコツーリズム推進に有効であると感じた。

●その他感想

外部からの視点による観光地等の視察時には、細やかな点等についてもご指摘やご提案をいただいた。ほんの少しの取組みが大きな効果をもたらすこともあることを踏まえ、今回の提案を参考としつつ、各種施策等に取り組んでいくこととしたい。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

環境カウンセラー(広報戦略)、環境映像ディレクター・プロデューサー 鈴木 順一朗 氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状と課題

大野市は平成20年より「越前おおの型エコ・グリーンツーリズム」と称した推進プランを策定し、「大野市が誇る自然環境、歴史、文化、伝統など豊富な地域資源や素材を最大限に生かした、都市住民と大野市民による対等で継続的な心と心のふれあい、交流活動」と位置づけ「越前おおの型エコ・グリーンツーリズム」の確立に向けまさに今動き出しているところである。具体的には、自然や農林業、日々の暮らしと結びついた体験型交流を提供することを目的とした、「ふるさとワークステイ」「ふるさと体験」等、積極的に取り組んでいる。郊外型では中山間部を中心に、「サイクリング」「トレッキング」「カヌーや川遊び」「古民家体験」「農業体験」「地域の食材を使った料理」「自然素材を使った加工品作り」などを展開し始めている。市街地では城下町の特色を生かした観光に取組んでおり、「越前おおのブランド戦略」「越前おおの観光戦略プラン」「水のみえるまちづくり計画」「越前おおの湧水文化再生計画」等、積極的に推進しているところである。これらの考えの上に、ハード面として、大野城周り、湧水池や観光地、城下町の街並みなどを整備し、大変きれいで素晴らしいものに仕上がっている。

これらがそれぞれ推進され、今まさに「始動している」といった印象である。エコツーリズムに関したもので、総合的には「越前おおの型エコ・グリーンツーリズム」を核とするわけだが、それぞれが始動したばかり、現状ではあれもこれもという風に見え、整理しづらいという印象であった。それぞれのコンテンツが一挙に均等に見えてくるような現状である。始動期であるので勢いが感じられたのは確かである。評価されるべき「やる気」が見えてくる。それだけに、これからは「大野市といえば〇〇」という特色を絞り込む必要があると感じた。それが「湧水」なのか？ 短い滞在期間で感触だけでも掴まなければならない。

郊外型ツーリズムでは「越前おおの型エコ・グリーンツーリズム」と称してはいるが、どちらかといえばグリーンツーリズム的なニュアンスが強く、市街地に関しては「観光・名産品」を中心に奮闘中という印象である。ここにどのような考え方で「エコツーリズム」を落とし込んでいくか、融合させ確立していくのが今回の目的であり、また、大野市からの要望の核になる課題でもあった。

●特に魅力を感じた地域の自然観光資源

大野市は、周囲を1000m級の山々に囲まれた標高170mから230mの高所に位置する盆地である。南北・東西の幅は約9km、この中を、九頭竜川、真名川、清滝川、赤根川の4本の大きな河川が流れており大野盆地の北側で1本に合流する。周囲の山々が育んだ水は、河川だけでなく、大野盆地の優れた帯水層に豊富な水をもたらしている。大野盆地に降り注ぐ雨や雪も大地に浸透し、豊富な地下水になる。いわば大野市全体が巨大な水瓶(みずがめ)になっている。こうした自然環境の上に、430年余り前、大野城が築かれ、城下町が形成された。市内のいたるところから湧水が湧き出し、浅く掘るだけでも豊富な地下水をくみ上げることが可能である。ここに「飲む」「冷やす」「洗う」のルールが作られ、人々の生活と共に「越前大野」の湧水文化が生まれることとなった。

特に魅力を感じた地域の自然観光資源は大きく分けて3つある。

①「何といってもやはり湧水」

戦後の高度経済成長期に開発や融雪のための水利用の急増などから、地下水位の低下や湧水の減少・枯渇が進み、大野市全体でこの問題に取り組んできた。現在では、以前ほどではないが地下水位や湧水も復活しだしている。住民や市の関係者からは「以前はもっと水が豊富だった！もっと溢れていた！それに比べたら今は少ない」という声があったが、外部からの目線、観光客の目線から見れば、まだまだ魅力たっぷり水たっぷりの自然観光資源である。今回、いろいろな方とお話しし、湧水や地下水についてご意見を伺ったが、古来より水が豊かであったが故に、豊

かなことが当たり前で、その貴重性や、この土地のが持つ巨大な水瓶の地質構造に大変な希少価値があるということのを忘れがちである。

また、大野市の湧水には、希少種の淡水型イトヨが生息している。国指定天然記念物 本願清水ではイトヨが数多く確認でき、また、水中からガラス越しに天然のイトヨを観察できる博物館「イトヨの里」も完備されている。環境教育の拠点となりうる立派な施設である。イトヨの生息地は本願清水だけではない。点在する湧水池には今でもイトヨが確認できる。「昔はいたるところにイトヨがいた。希少な魚になるとは思わなかった！」というのが大野の人々の正直な感想である。それだけ水が豊かで清らかだったという証明でもある。現在は本願清水をイトヨの里としているが、個人的な希望として、大野市の湧水池全部をイトヨの生息地として甦らせ、大野市全体を「湧水のまち、イトヨの里」と呼んでいただけるようになって欲しい。もちろんイトヨの生存も重要だが、大切なのは、イトヨが普通に存在できる清らかな水が溢れる土地であるということだと考える。

そして忘れてはいけないのが、水と共に生きてきた大野の人々の生活感。みんなで水を使い、水を利用し、水の周りに集った生活感が、今でも、どこことなく、どこことなくではあるが感じられる。というのも水量が減ったことと、各家に地下水が引かれており蛇口をひねればおいしい水が出る。わざわざ湧水で野菜を洗うことがなくなった便利さから実際に見る場面も少ないと推測されるのだが、それでも尚、昔から使われてきた湧水池を見ると、その面影が残っているのである。これを使わない手はない。生活感＝面影が残っているのならば住民も観光客も共に集える井戸端ならぬ湧水端を復活させられる。そのような印象であった。

②「城下町と大野式おもてなし」

大野市は城下町である。「碁盤の目」に近い形で町が形成されている。そこには寺町通り、400年以上も続く「七間朝市」が開かれている七間通り、城下町を見下ろすかのような象徴的存在の大野城、各所に点在する湧水など、北陸の小京都というキャッチフレーズを大野市が打ち出すほど味わいのある街である。当然ながら「湧水の里」であるからして各所にある用水路には趣と生活感がある。そしてそこには「知り合えばとてもほっこりするほどあったかい大野人のおもてなしの心」が生きている。

大野の「食」も見逃せない魅力の一つ。山の幸と清らかな水をふんだんに使った大野の「食」は、「食のエコツアー」としても魅力的だ。

これらの「城下町散策」と「大野の食」をマッチングさせ、観光客に堪能していただくツアーは、歴史、風俗、文化的にも価値が高く、また、それらが自然からの恩恵、特に「水」の恩恵であるという価値観を伝えられる観光型エコツアーの可能性を感じた。

③「エリアマネジメントしやすいサイズ」

南北、東西の幅が約 9km のほぼ五角形をした大野市。このサイズの町の中に歴史と文化、風俗、湧水の魅力がぎゅぎゅ詰まっている。これからの課題はそれをどう整理し、どう見せていくかである。この「サイズ」がとても有利に思える。というのもとてもデザインしやすいサイズであるからだ。町をデザインする時、しやすい形やサイズがある。当然管理は行政がするわけだが、中心に城下町があり、それを中心に町が広がっている。しかも広がるといっても山々に囲まれた盆地であるからそれ以上は広がらない。わかりやすく管理しやすい範囲である。当然ながらこれは観光客にとっても動きやすく、わかりやすい範囲である。今後、町をデザインし、中心部を観光の拠点（基地）として展開するに当たって、このマネジメントしやすい大野市の広さ「サイズ」は強力な武器だと考える。

環境に特化したツアーに関しては、無数のツアーが考えられるほど自然環境は揃っている。つまり盆地であるからその周りは山、山、山。遠くは白山山系から連なる山々からの水で溢れ、川も多い。森林が深く、生態系も維持されている。町を少し離れれば、満天のスターウォッチングも楽しめる（環境省「日本一星空がきれい」に認定）。この自然に特化したエコツアーの実践に関しては、無限の可能性のある自然環境だからこそ、一つずつ大事に展開していただければと思う。たくさんのツアーを組むことは可能だが、それを運営し維持していくことにはかなりの

労力が必要とされる。エコツアー成功の秘訣は数より質である。

●アドバイス（講義等）の概要

エコツーリズムの考え方はなかなか伝わりにくい。これは私が普段から感じるエコツーリズムへの印象である。

まず、現在の長野市にとって「エコツーリズムをどのように組み込んでいけるのか？」が大きな課題であった。1日目は行政側から長野市についての解説をしていただき、次に集まっていた関係者の皆様に、環境省のパンフレットを見ていただきながらエコツーリズムの考え方をお話させていただいた。私の解説の未熟さは反省するところであるが、やはりわかりづらい。考え方は理解していただいても、それが長野市とどのように関わるのが今一つ腑に落ちないものであった。第1日目であることから、解説はそれぐらいにし、環境省のエコツーリズム学習映像より、認定第一号の飯能市「湧水を訪ねるエコツアー」の映像を見ていただき、イメージをより明確にさせていただいた。

それから、長野市が抱える課題について意見を出していただいた。印象に残った課題は「現在、長野市の観光は滞在（宿泊）型ではなく通過型の観光地である。将来は滞在型の観光地を目指したい」ということだった。どうすれば魅力的な町づくりができ、通過させずに滞在（宿泊）させられるのか？ それをエコツーリズムとどう融合させたら効果的なのか？ 宿題をいただいた形で次の日はヒントを探し回った。

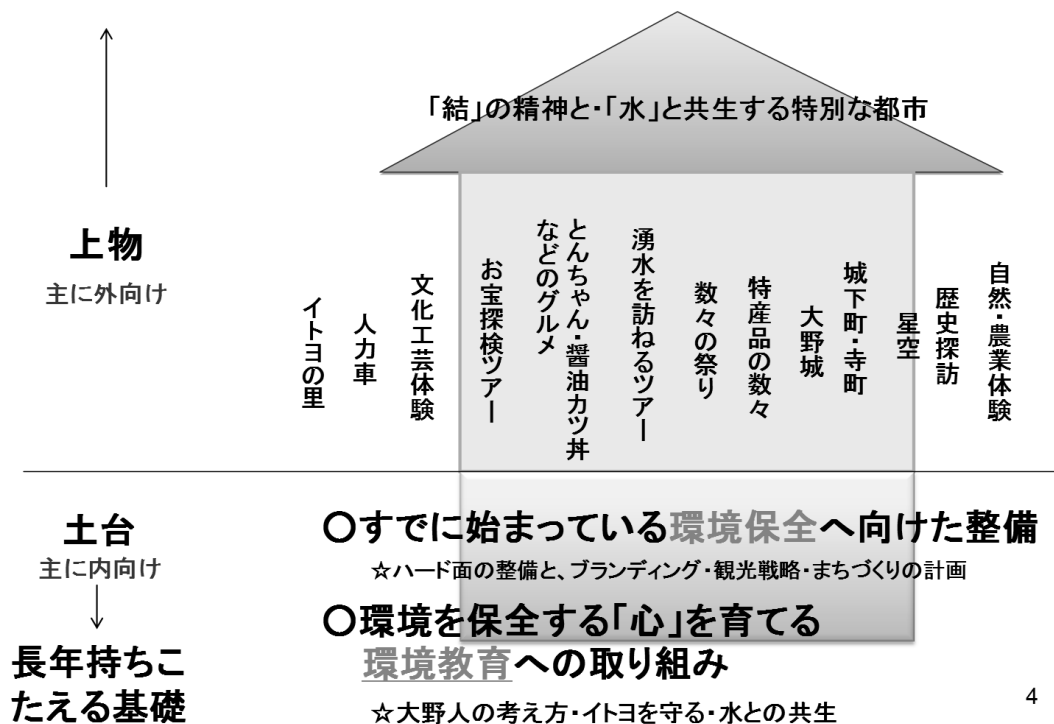
そして3日目最終日。いろいろな可能性をまとめ、なるべく具体的に改善点をアドバイスさせていただいた。とはいえ、2日間の滞在ですぐに答えが出るほど甘いものではない。一つでもヒントになればという思いを伝えた上で、パワーポイントにまとめた要点をお聞きいただいた。

以下要点

①長野市は「エコツーリズム」の考え方を取り入れるべき自然環境の上に成り立っている歴史ある都市だということをも主張させていただいた。「水と共生する」という全国を代表するモデル地区になれる要素がたくさんある。それを実現するためには「環境保全・観光振興・地域振興・環境教育のエコツーリズムにおける4つが柱」がこれからの長野市には不可欠かつ有効であることを解説した。

②次にエコツーリズムをどのように取り入れていただきたいか。例えて言えばエコツーリズムは、家で言う「土台」の部分。しっかりした「土台」を時間をかけて作れば上物である家は100年、200年も持つ家となる。その「土台」になるのがエコツーリズムの考え方であるという説明をさせていただいた。「人はどんな場合でも環境の上に生きている。その環境をこれ以上悪化させないように守り、またできる限り復活させ、うまく環境と共存しながらその特徴を利用していくのがエコツーリズムだと考えています」ということを、長野市を例に図を作成し、解説させていただいた。

時代のニーズに合わせてながら変化する各コンテンツ



土台になる部分は外からは見えない部分。内向けの努力が必要な部分。街づくりの計画や、湧水を守っていく計画など、環境保全とは切り離せない行政目標が土台の1つ目の要素。

もう一つは環境教育への取組。これは住民が自分たちの住んでいる環境を再確認することや、これからを担う子どもたちに原体験として自然環境の楽しさや、食の恩恵などを伝えることが大切であることを説明させていただいた。

上物は、観光振興と地域振興。観光もグルメもエコツアーも農業体験や古民家体験もすべて環境の上で行なわれるので、これは、時代のニーズに合ったものを選択し、展開すればいいものである。このように考えれば、グリーンツーリズムもブルーツーリズムもすべてのツーリズムが一つの頑丈な土台の上で行なわれるコンテンツとなる。つまり、似ているけれども別のものとして考えがちな各ツーリズムも一元化できる。さらに屋根には目立つように看板を置くが、現在大野市が掲げているメインキャッチフレーズの「結の故郷（ゆいのくに）・越前おおの」と、これから可能性のある「湧水の町」を掲げてはどうか、という提案をさせていただいた。この図により、ある程度具体的なエコツーリズム導入の理由や価値のイメージが伝わったと感じている。

これはあくまでも私の考えだが、全国のエコツーリズムに関して多くの例を見聞きし考えた結果、誤解されがちなのが「エコツーリズムという家を作らなければいけないのでは」と思われてしまうこと。その場合、土台にはエコツーリズム推進協議会や関係各所・関係者やガイドとなり、上物には、環境教育や、エコツアーがコンテンツとして並ぶ。屋根には「〇〇エコツーリズム」が掲げられる。それではグリーンツーリズムも推進しているところはどうか？ それはもう一軒グリーンツーリズムの家を作らなければならない。観光中心のツーリズムもあれば、観光だけの家も作らなければいけない。しかも土台の要である運営団体が傾けば家も傾いてしまう。しかし、そもそも環境という同じ土俵の上に展開されるのだから、一つにした方がわかりやすい。しかも土台が頑丈になる。土台が安定しなければ家も長続きしない。土台が大きくしっかりしていればちょっとやそっとの嵐でも傾きはしな

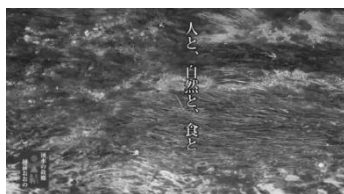
い。これが私流の考え方である。

さて、次に提案させていただいたのが、玄関や窓や壁の部分。どうすれば「入りたい家」の装飾・演出をできるのかという点を、思いつく限り具体的にお話した。

③大野の人々にとって「湧水」や「地下水」の豊富さは、当たり前のもの。しかし、外からくる人々にとっては驚きの条件である。地元にとっては当たり前すぎて気づかない魅力であり、そのへんの意識を改善していただきたい。そして、巨大な水瓶である地質・地層構造の希少性を広報すべき。また、大野市のキーワードである「結（ゆい）」の根源にあるものが「水」、結びつけているすべてのものに共通しているものが「水」であることを強調し、象徴として「湧水」を前に押し出す売りが効果的ではないかという提案をさせていただいた。

④さらに、大野市にはたくさんの魅力的な素材があるが、それが並列しすぎていて「大野市といえば〇〇」という印象が薄いのではないか。これを湧水とする場合には、すべての観光素材に「湧水アピール」のニュアンスを入れ込んでみてはいかがだろうかという提案した。

その上で、即席で制作した30秒ほどの大野市湧水イメージCM映像を例として見ていただき映像を使ったイメージ戦略も効果的であることを提案した。



⑤人々は「うまい食べ物」に集まる！ そのためには「食べる場所」を「食べやすく配置」する将来構想とエリアづくりが課題である。現在大野市には「食」の空間が点在している。これを集客のために食べやすく配置することを提案した。さらに、水の恩恵を伝えるためにも「湧水」をネーミングした郷土料理の提案もした。コンセプトは「水」がうまいから食べ物がうまい！ これぞ大野の「食」の原点であるという打ち出し方もあるのではないか。

⑥大野市では市のシンボルデザインが出来上がったばかりである。これを市の主たるところに表示し、大野市全体のイメージシンボル化（すでに計画中大だと思いますが）ということも提案させていただいた。

⑦現在、大野市の観光協会他、いろいろなところから様々なパンフレットやチラシが出ているが、観光客からみると多すぎて混乱気味かもしれないので、整理してみてもいいかという提案もさせていただいた。

⑧大野市の整備事業は本当にすごい。物産センターや湧水の名所など、きれいに整備された。ただ、申し上げづらい印象であるが、きれい過ぎて温かみが抜けてしまったような印象がある。なので、もちろん作り直すのではなく、そこにちょっとした工夫をすることで温かみを蘇らせる可能性があるということ具体的に提案した。

⑨せっかく町中に「湧水」や「湧水池」「用水路」があるのだから、大野市の伝統工芸である「竹あかり」を映し出さない手はない。水に映る明かりは人を呼ぶ。水と光のコラボレーションを今後は是非とも考えて欲しいという提案をさせていただいた。

以上が、アドバイスの概要である。

●全体構想への取組状況・意向について

今回は、エコツーリズムの導入口であった。まずは、エコツーリズムについて解説し、それでもなかなか解釈が難しいので、図をもって再び解説させていただいた。2回の解説でエコツーリズムの価値をある程度お分かりいただけたと思う。大野市の場合、まだまだこれからである。可能性は理解いただいたと思うので今後検討されていけるのではないかと。素材はたくさんある。自然遺産型ではなく、里山&城下町型のタウンエコツーリズムの成功に期待したい。エコツーリズムの導入口に立ったという意味では、長い目で、「ゆるぎない土台作り」を今後も応援させていただきたい。

●地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

今回大野市に伺った大きな目的は、おおのの水・湧水が「宝」になりえるか？ということであった。前述の通り、大きな「宝」だと私は考える。水がきれい、水がうまい、水が豊富など、いいことだらけに聞こえるが、住民にお聞きすると、湿気の問題がかなり頭の痛い課題となっている。湧水池と隣接する旅館などは、エレベーターの機械部分がすぐに結露し、お困りになっていた。外から見るとわからないご苦労である。しかし、そうした問題と共存してきたのが大野市の人々である。水との付き合い方を心得ているのである。

印象的だったのが、たまたま今回の研修で配られたペットボトルの水（県のご担当が持ってきてくれたものだが）を参加者も飲んでいただけたのだが、研修が終わった時、数人から「この水うまくないね！」という言葉が出た。それも同時に！ さすがだと感心させられた。私には十分おいしい水であったのに、さすが名水と共に生きてこられた方々だ。それが大野の「当たり前」。その感性・感覚・味覚こそ「宝」なんです！ それに気づいていただき、是非とも大野の水を「未来への宝物」としてつなげていっていただきたい。

最後に、大野市のご担当、福井県のご担当には、視察、会議室の設営等、大変お世話になりました。ありがとうございました。